

第3章 全国の建物等に設置されているPVの導入状況調査（AI解析）

本章では、第2章で整備したデータをもとに、AI解析等を用いて全国の建物等に設置されているPVの導入状況調査について記載している。

全国の建物等に設置されているPVの導入状況について調査手順を図3.0-1に示す。

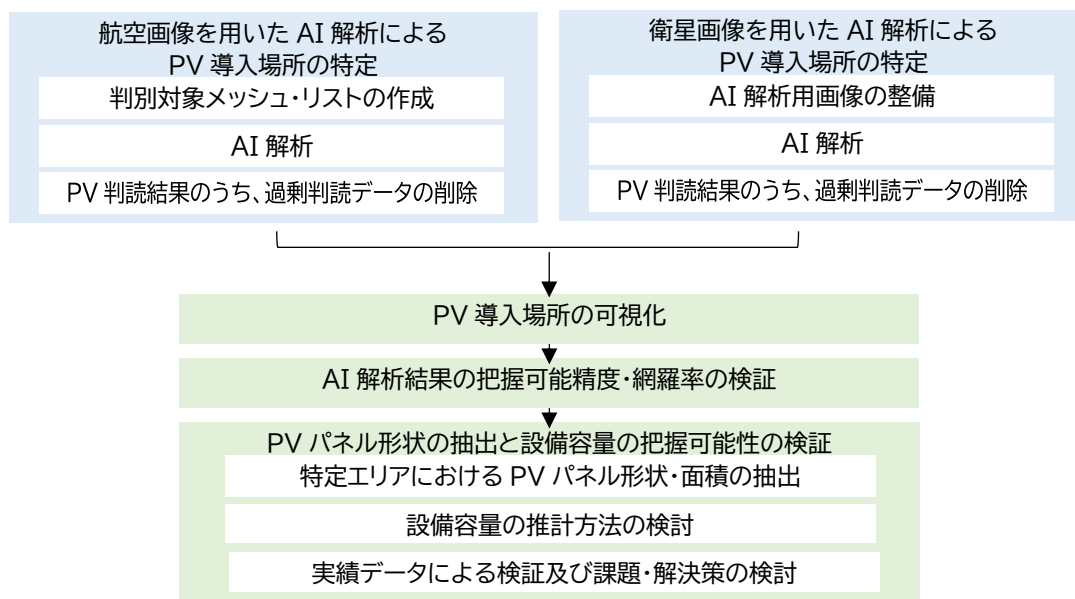


図 3.0-1 全国建物等に設置されている PV 導入状況調査の手順

3.0.1 使用する PV 判読システムの特徴

PV 導入場所の特定は、PV 抽出で実績のある AI 物体検出技術を活用した、オービタルネット社製航空画像判読ツール『Geo Detector』（以下、PV 判読システム）を用いた。PV 判読システムは、ディープラーニングの物体検出技術を応用し、建物上の PV を検出し、PV を内包する短形として抽出し GIS データとして、短形ポリゴン及びポイントデータとして記録するものである。

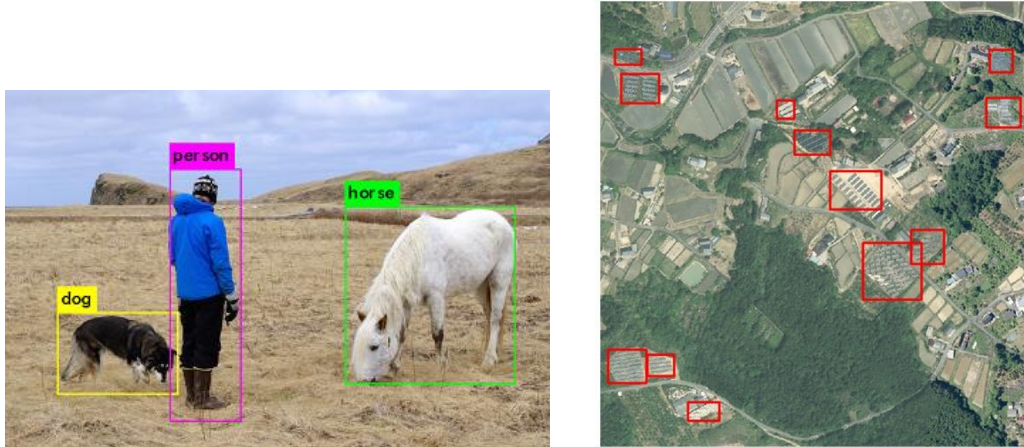


図 3.0-2 (左) 一般的な物体検出 (右) 物体検出を応用した地物検出

また PV 判読システムは、AI 解析用画像の整備、AI 解析、AI 解析結果の GIS データ化、の一連の工程を一つのコマンドで実施する※。検出後の PV 判読結果は、後工程で実施する過剰判読データ削除等で、作業者が可視化判断しやすい短形ポリゴンの状態でデータベースに登録する。その後、過剰判読データ削除等のすべての編集作業実施後、短形の代表点ポイントデータを生成し、データベースに再登録する流れとなっている。

※実際には全国 5 分割して、分割したデータセットの判読が完了後、結果を可視化確認したのち、データベースに登録する。

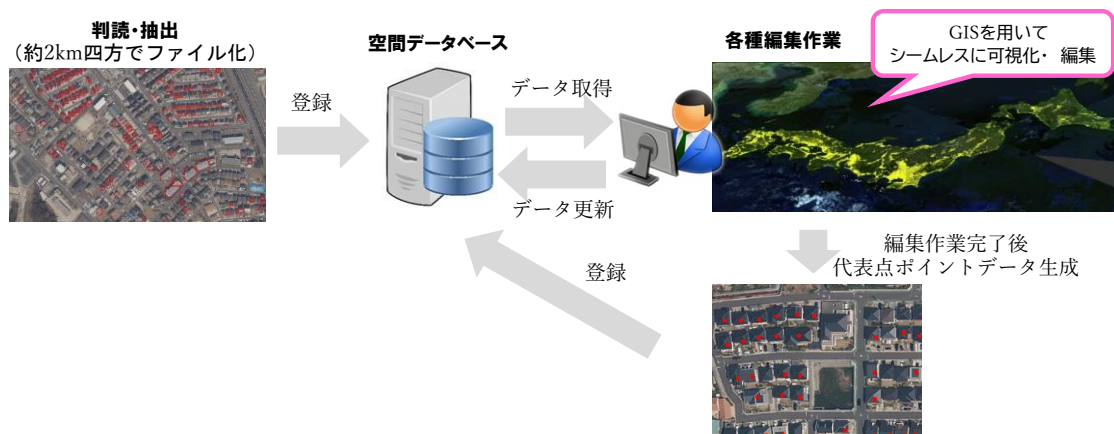


図 3.0-3 AI 分析による建物ソーラー場所の特定の流れ

3.0.2 AI 解析における課題と対応

第 1 章で航空画像及び衛星画像の特性から AI 解析において下記の課題が想定された。

- ・解析元となる画像に起因するもの
- ・PV 判読システムの性能に起因するもの

画像の地上解像度や画質が低い場合は、対象となる物体の検出もしづらくなる。これは人

間でも AI でも同様である。また、PV 判読システムの性能に関しては、教師データのサンプリングや使用する畳み込みニューラル・ネットワーク・モデル※や、学習の改善により改善する余地が大いにある。但し現状のシステムにおいて直ちに行えることは限られている。そこで現状把握している課題とその対応策について整理した。できる限り対応することによって全体の精度向上を目指すこととした。

※物体や顔、シーンを認識するために画像の中からパターンを見つけるのに特に有効なニューラル・ネットワーク。

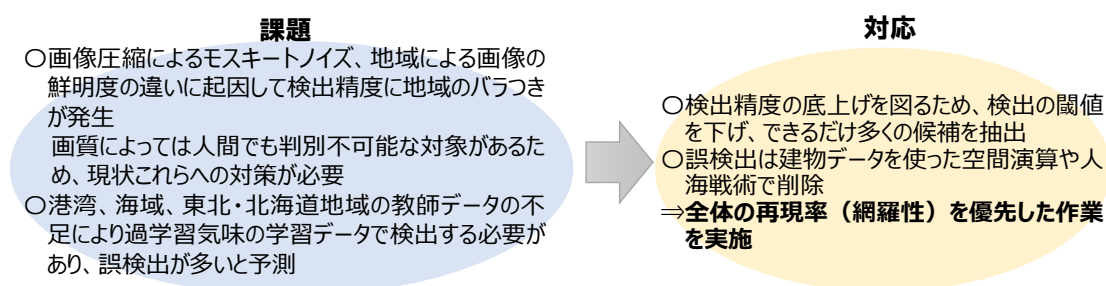


図 3.0-4 AI 解析における課題と対応

3.1 航空画像を用いた AI 分析による PV 導入場所の特定

図 3.1-1 は、航空画像を使用した AI 解析のイメージである。NTT インフラネット社から提供を受けた画像データセットを加工することなく、PV 判読システムの環境に接続していることが特徴である。(加工は PV 判読システムが自動で実施) また、対象となる判読範囲の設定も 3.1 (1) で後述するとおり、専用ツールを作成している。

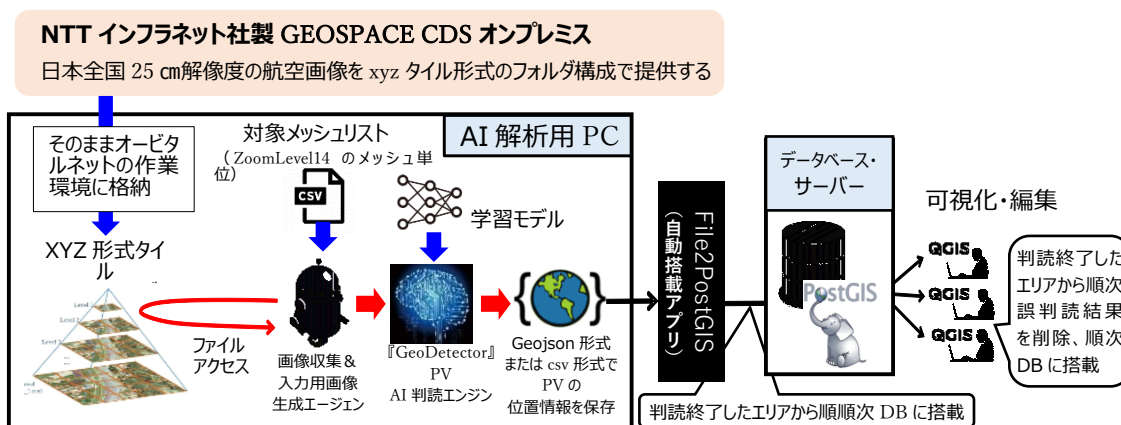


図 3.1-1 航空画像と AI を用いた PV 導入情報の把握工程のイメージ

(1) 判読対象メッシュ・リストの作成

判読システム用の解析範囲を設定するため、PV 判読システムの補助ツール『タイルメッシュ生成 QGIS プラグイン※』を用いて、日本全国を対象にメッシュ分割した。このメッシュが一つの処理単位となり、GIS データもこのメッシュ単位で生成される。このメッシュの大きさは XYZ タイルのズームレベルの範囲で自由に設定できるが、高いズームレベルで設定するほど無駄な判読領域が減少し、生成される GIS データファイル数が増える。そこでバランスをとり XYZ タイルのレベル 14 にあたる約 2 km 四方のメッシュデータファイルを生成した。

※オープンソースのデスクトップ GIS ソフトウェア “QGIS” に組み込んで使用する

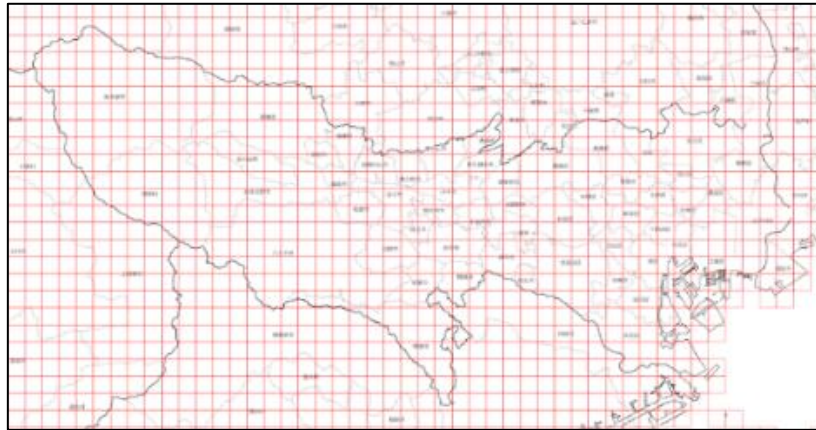


図 3.1-2 メッシュイメージ（東京都を中心とした範囲）

（２） 航空画像を用いた AI 分析

1) 特定地域におけるテスト分析と網羅率の検証

全国の AI 解析を行う前に、一部地域（愛知県）での AI 解析を試行的に実施した。全体工程に余裕がないため、この時点でクリティカルな問題を把握・解決しておくことが目的である。

愛知県を対象に AI 解析で PV 抽出した結果を GIS に取り込み可視化した。問題なく検出処理が行われ、正しく位置情報が付与されていることを確認した。

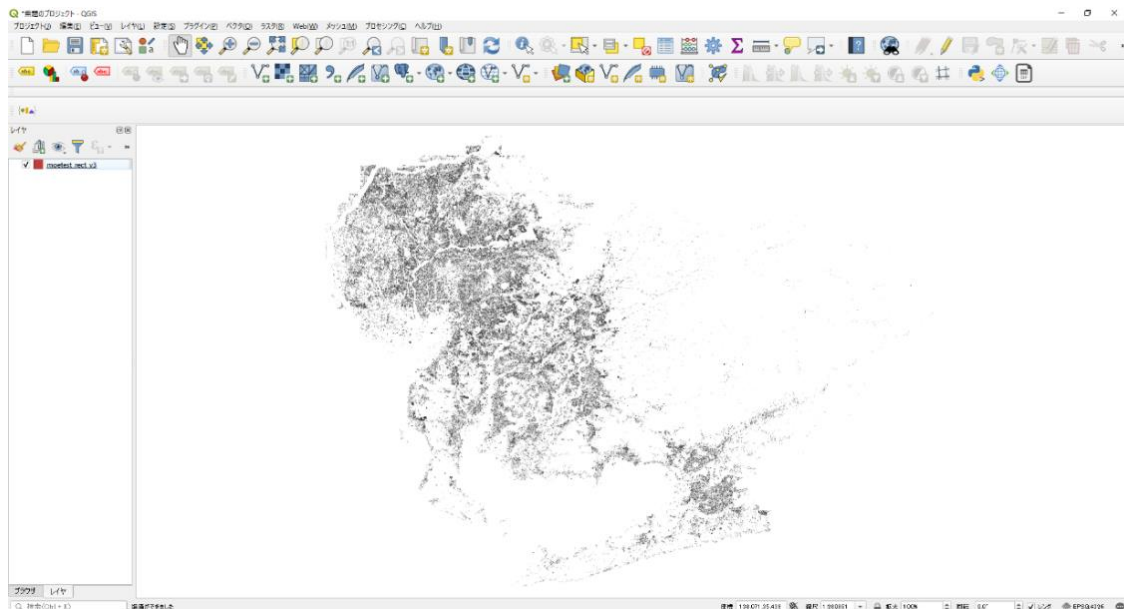


図 3.1-3 PV 検出結果の可視化（愛知県）

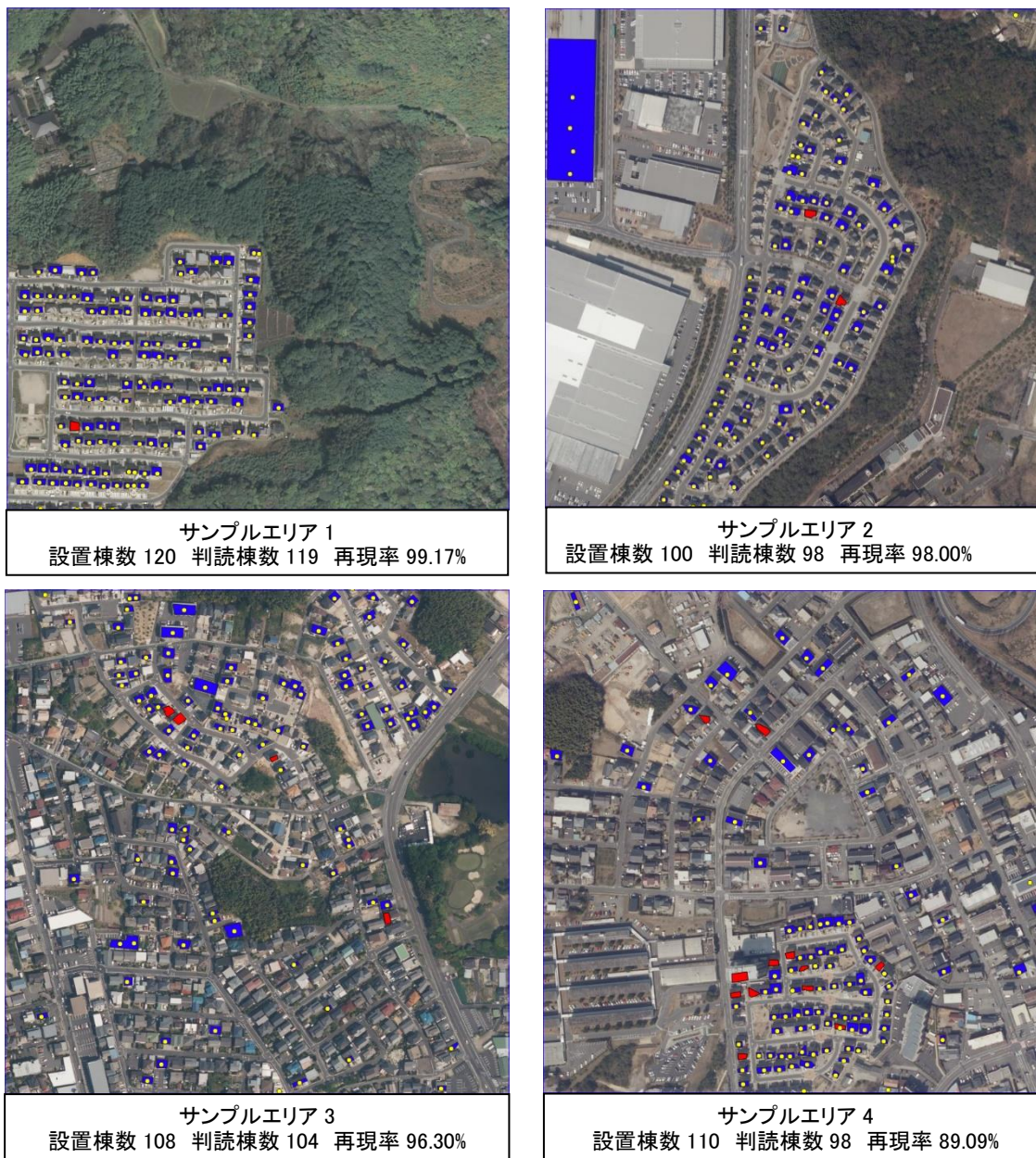
① テスト地域の選定と再現率の検証

ズームレベル 16 のメッシュ領域（約 500m×500m 四方）のうち、名古屋市近郊において PV 設置個所が多い 4 メッシュを選択した。次に対象のメッシュごとに、背景となる航空画像をもとに PV 設置建物を目視判読し、該当する建物（PV）をポリゴン入力した。AI 判読は PV を

囲う短形の重心が PV 判読結果のポイントとなるので、PV の設置形状に配慮しながらポリゴン入力を行った。

判読の条件として、確実に PV が設置されていることが目視で確認できること、またそれぞれのメッシュ領域に完全に収まっていない建物は評価の対象から除外することとした。

次に、PV を含む建物ポリゴンに PV フラグを立て、さらに PV 判読結果ポイントを含む建物に予測フラグを立て、PV フラグ建物総数に対する予測フラグ建物総数の割合から再現率 (Recall) を算出した。

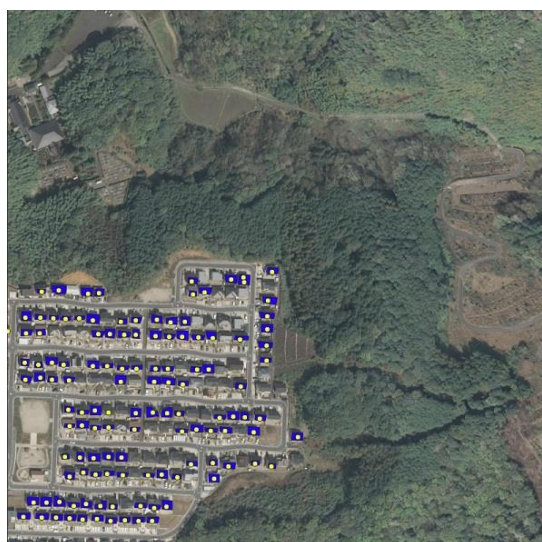


Total 設置棟数 438 判読棟数 419 再現率 95.66%

図 3.1-4 航空画像 PV 判読結果の網羅率検証

② テスト結果に対する課題と対策

概ね良好な結果であったものの、名古屋市近郊は、PV 判読システムの重みモデルを作成するにあたり、初期の教師モデルの多くを使用した地域である。この地域で再現率 95%となると、他の地域を含めると 5 ポイントから 10 ポイント低下する恐れがある。そこで PV 判読システムの重みモデルに使用した畳み込みニューラル・ネットワーク・モデルと異なるモデルを用いて再度学習を行い、新たに重みモデルを生成した。この重みモデルを使用し再度 PV 判読を実施した。さらに前回実施した PV 判読結果をこれにマージ、改良 PV 判読結果として再現率を算出した。



サンプルエリア 1
設置棟数 120 判読棟数 120 再現率 100.00%
0.83 ポイント向上



サンプルエリア 2
設置棟数 100 判読棟数 99 再現率 99.00%
1.00 ポイント向上



サンプルエリア 3
設置棟数 108 判読棟数 106 再現率 98.15%
1.85 ポイント向上



サンプルエリア 4
設置棟数 110 判読棟数 109 再現率 99.09%
10.00 ポイント向上

Total 設置棟数 438 判読棟数 434 再現率 99.09% 3.43 ポイント向上

図 3.1-5 改良型手法航空画像 PV 判読結果の網羅率検証

3.43ポイント向上と期待したとおりの結果であった。中には10ポイント向上した地域もあり、これで全国対応しても問題ないと判断した。結論として前重みモデルと新重みモデルを用いて計2回の全国のPV判読を実施。これらをマージしたものを航空画像のPV判読結果とすることにした。

2) 全国のPV判読の実施

PV判読システムと航空画像データセットを用いて全国の対象109,655メッシュの処理を実施した。実際には全メッシュ・リストを5分割し、1セット終了するごとにGISで判読結果を可視化確認しながら全対象の処理を進めた。

AI分析は、ズームレベル19の画像（地上解像度約25cm）256px×256pxを縦横4枚接合して1枚のAI解析用画像として判読処理を行う。この作業は『画像収集&入力用画像生成エージェント』が自動的に処理する仕組みになっている。1メッシュ（約2km四方）を処理するには、上記判読処理を256回繰り返す。5秒にこの256回の判読が行われ1メッシュの処理が完了するため、ベンチマーク的には全メッシュが548,275秒（約6.3日）で完了し、2モデル合わせて13日弱で完了したことになる。参考にPV判読システムに使用したワークステーションのスペックを以下に示す。

表 3.1-1 PV判読システムに使用したワークステーションのスペック

CPU	Core i9-11900K(3.50GHz-5.20GHz/8コア/16スレッド)
メインメモリ	64GB DDR4 SDRAM
GPU	NVIDIA GeForce RTX3090 24GB
Primary Disk	2TB SSD
Secondary Disk	8TB HDD
OS	Ubuntu 20.04LTS

航空画像を用いた PV 判読結果を GIS で可視化した結果を図 3.1-6 に示す。

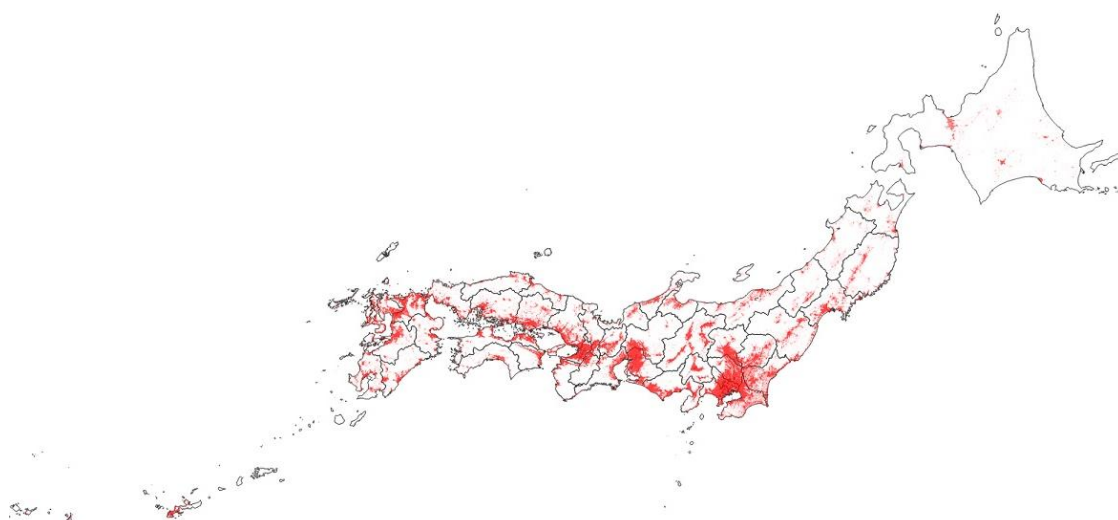


図 3.1-6 改良型 PV 判読結果の可視化

(3) PV 判読結果のうち誤検出・過剰判読データの削除

本業務の目的が、AI 解析を活用してより現実に沿った PV 導入場所を特定することにあるとの認識のもと、誤検出・過剰判読データの削除作業を実施した。当初は以下の方針で実施する予定であった。

- ① 航空画像データ作成時点より建物データの作成時点が後であるもの
⇒ 建物ポリゴンで差分を削除
- ② 上記以外のもの：地域を分割して人海戦術によって消去

1) 航空画像と建物ポリゴンとの位置ズレ等の課題

①については、航空画像と建物ポリゴンとの位置ズレ箇所が多いこと、両者の経年変化によってデータの差異があり、作成時点が詳細に把握できないこと、建物形状が航空画像と比較して大雑把にトレースされている箇所があることなど、単純に建物ポリゴン以外の検出結果を除外すると、正の検出結果が多く削除される可能性があることから、建物ポリゴンで差分を削除することは見送った。とりわけ位置ズレに関する課題は、航空画像と衛星画像の間でも発生しており、本問題の解消は今後の重要課題である。詳しくは 3.2 (2) 5) で解説する。

2) 人海戦術による誤検出データ等の削除

以下の建物 PV 以外の誤検出及び不適格検出箇所が稀に検出されることを確認している。これらの人海戦術で削除する。

ビニールハウス・ガラスハウス、畑上のビニールカバー、野立て PV、駐車場、屋根上のガラスパネル、その他明らかに野立て PV でないと判断できるもの、建物上に 2 件以上の抽出結果があるもの。

これらを検出結果全体の 1% を目標に削除を実施した。その結果、全検出件数 3,105,306 件のうち 35,811 件の不要データを削除し、削除後件数 3,069,495 件となった。時間の制約があったため、すべての不要データを削除することはできなかったが、機械的に削除が困難な不要データを一定数削除することができた。

但し、この作業は適合率に向上に寄与するが、網羅率が向上することはない。削除作業完了後、検出結果短形のポリゴンデータから代表点ポイントデータを生成し、空間データベースに登録した。

3.2 衛星画像を用いた AI 分析による PV 導入場所の特定

航空画像と同様に AI 解析ツール『Geo Detector』を用いて PV 導入情報を把握した。航空画像データセットとの解像度の違いにより、判読結果において 90%の再現率を求めることは困難と推察される。しかし衛星撮影は短期間で全国網羅性に優れており、今後の計画的なデータ更新の検討を見据え、衛星画像による AI 判読も実施した。

図 3.2-1 は、衛星画像を使用した AI 解析のイメージである。日本スペースイメージング社から提供を受けた画像データセットは 1 枚が約 10km 四方のメッシュサイズであるため、画像を分割して AI 解析用データセットを整備した。詳しくは後述するが、この画像分割も PV 判読システムの一機能であり、自動で作成される。

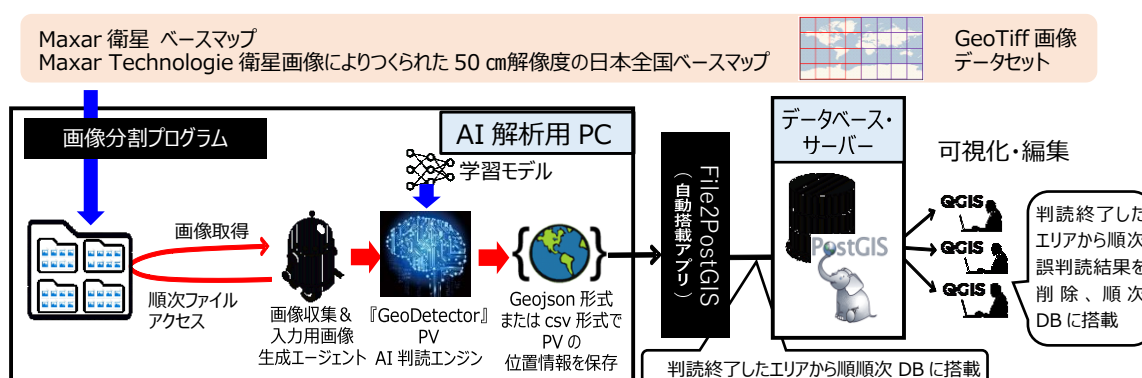


図 3.2-1 衛星画像と AI を用いた PV 導入情報の把握工程のイメージ

(1) AI 分析用画像の整備

第 1 章で、日本スペースイメージング社から提供を受けた衛星画像には、最新の撮影画像で構成される“vivid”データセットと、過去 5 年以内の晴天率の高い画像のみを接合して再構成した“Dynamic モザイク”データセットが存在していることを解説した。また、これとは別に関東地域のみではあるが、地上解像度 30cm のデータセットが提供されている。この 30cm の画像をもとに AI 解析を実施することも検討したが、一部地域であることと、この地域には航空画像の最新のデータセットが存在していることから、本業務での使用を見送り、結果として、最新の衛星画像の“vivid”データセットを本業務で使用することにした。

“vivid”データセットは、最新の画像であるゆえ、中には薄雲がかかっている地域もあり、部分的に“Dynamic モザイク”を使用することも検討した。しかし、全国の画像を精査してハイブリッド方式で整備することは容易でないことから最終的に“vivid”データセットのみを使用した。薄雲の地域も AI 解析を行った。

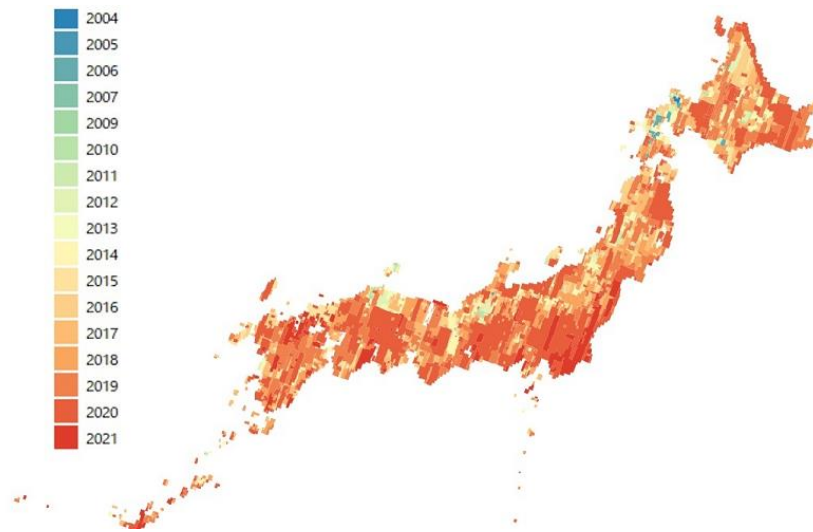


図 3.2-2 最新の衛星画像、“vivid” データセット

まず、衛星画像ファイルに埋め込まれている位置情報を解析し、Dynamic 図郭のデータ (5,743 図郭) を整備した。次にこの図郭データを GIS で可視化した。その結果、このデータセットは北海道の一部が欠如していることを確認した。のちに日本スペースイメージング社から不足分の図郭のみの画像データセットの提供を受け、日本全国、6,300 図郭を取り揃えた。

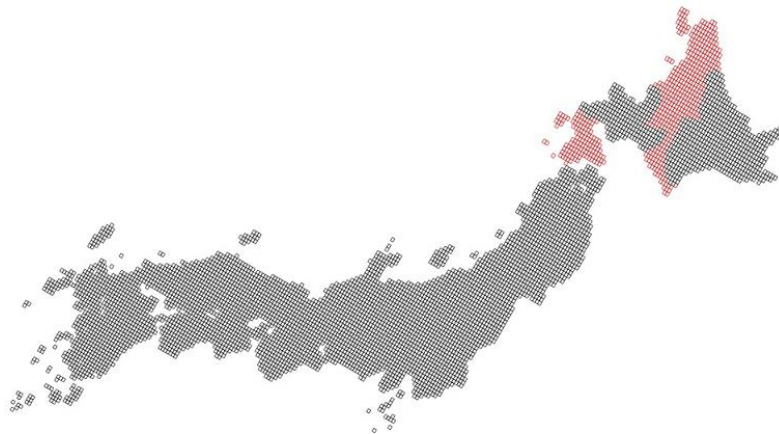


図 3.2-3 Dynamic 図郭で可視化した “vivid” データセット

また、Dynamic 図郭 (19,584px×19,584px) の画像から xyz タイル (256px×256px×ズームレベル) の画像生成するには、投影変換から行う必要があり、さらに日本全国の画像データを約数兆ファイルの生成作業を行うことは工程的に困難である。そこで、xyz タイルから AI 解析用画像を整備する方法は用いず、19,584px×19,584px の画像を AI 解析に最低な画像縦、横) サイズに単純に分割する方法を選択した。画像と位置情報の紐づけはワールドファイル、または GeoTIFF を自動生成することで対応した。

分割後のサイズはCDSの25cm解像度に対して50cm解像度であることを考慮して、500px×500px程度とする。Dynamic 図郭の画像（1ファイル19,584px×19,584px）を、最終的にAI解析に最適なサイズ(544px×544px)に分割し、約816万ファイルのAI解析用衛星画像データセットを整備した。

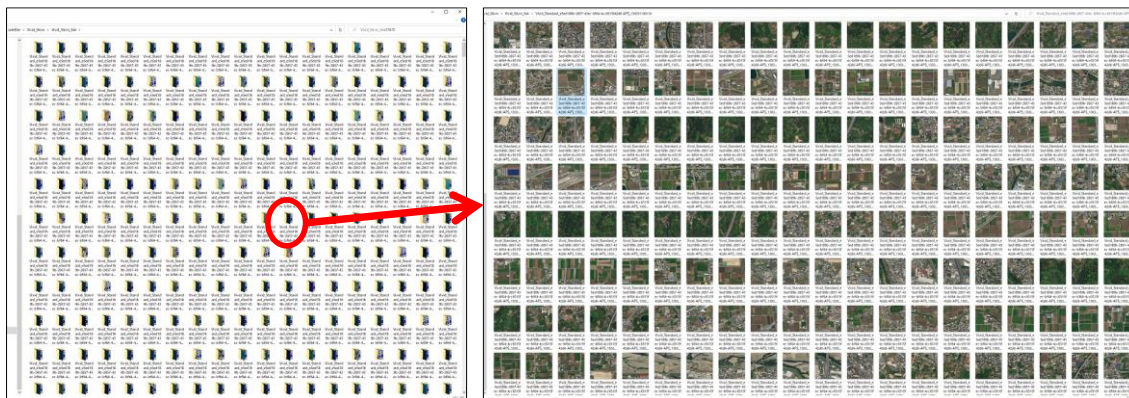


図 3.2-4 分割後の AI 解析用衛星画像データのイメージ

ファイルに直接アクセスして取得するため、Web サーバー経由で http アクセスして取得する航空画像の PV 判読システムと比べて高速にデータを取得処理することが期待できる。

(2) 衛星画像を用いた AI 分析

1) 特定地域におけるテスト分析と網羅率の検証

① 網羅率の検証

航空画像の AI 解析と同様、全国の AI 分析を実施する前に一部地域で AI 解析を行い、可視化を行った。(衛星画像を背景に用いると PV が識別できなくなるため PV 判読結果のみ)



図 3.2-5 衛星画像を用いたテスト AI 分析結果の可視化

この時点では、全国衛星画像のデータセットの提供を受けておらず、事前に提供を受けた4メッシュ分の画像のうち1画像(約10km四方)において解析を行った。さらに航空画像と同様にこの解析結果のうち、1km四方において網羅率の検証を実施した。

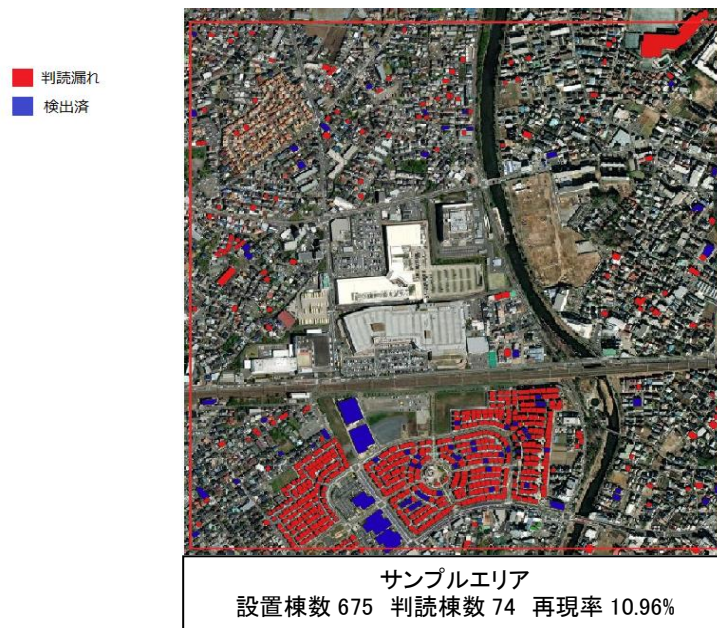


図 3.2-6 当初の衛星画像を用いた PV 判読結果の網羅率検証

②テスト結果に対する課題と対策

結果として、網羅率 11%にも満たない結果となった。考えられる要因として衛星画像の地上解像度が 50%であることに加え、モスキートノイズなど不可逆圧縮による画質の低下により、人間でも判読が難しい箇所が多い点である。このことは同じ地上解像度が 50%の航空画像では、網羅率 80%~90%を超えることから裏付けられる。

このような結果から、航空画像との共通のディープラーニングの重みモデルを使用することに無理があることを認識し、衛星画像専用の重みモデルを構築することが唯一の解決策と考えた。アノテーション作業に費やせる時間は約 1 ヶ月程度であったが、教師データを整備することから始め、さらに学習により専用の重みモデルを構築した。まずは、Vivid50 cmのサンプル画像から教師データセット画像 1,000 枚強のアノテーション作業を実施した。

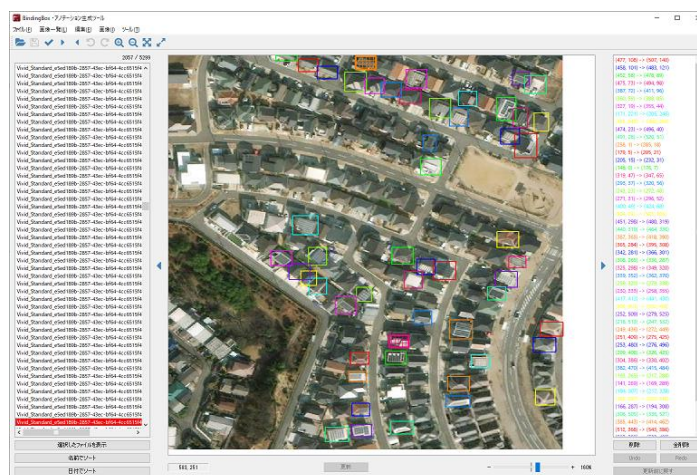


図 3.2-7 オービタルネット社製アノテーション・ツールによる PV 識別作業

一旦、アノテーション作業の途中段階で学習を行い、その結果得られた重みモデルを使用して、再度衛星画像を用いた PV 判読を実施した。その結果が図 3.2-8 である。航空画像の重みモデルを用いて衛星画像の PV 判読を実施した結果では、背景の衛星画像を使うと判読結果が識別できないほどの低い検出率であったが、途中段階ではあるが明らかに判読率が増しているのが可視化で読み取れる。



図 3.2-8 途中段階の改良版衛星画像 AI 分析結果の可視化

引き続きアノテーション作業を続け、最終的に有効画像 1,500 枚以上の教師データを作成し、水増しにより 6,000 枚程度の学習用データセットを作製した。さらにディープラーニングによる学習を行い、衛星画像専用の重みモデルを構築した。

衛星画像の場合、季節や日照条件、撮影方向によって品質に大きなばらつきがあるため（パネルの投影面積が圧縮されたり、建物の影で判別できなくなったり、太陽光の反射で判別できなかったり、JPEG のノイズで屋根の模様と区別できなかったりする）、安定した判読結果を得ることは極めて難しい。それでも人間が PV 判別できないような状況でも安定して判読できる AI モデルの構築を心掛けた。その結果、途中段階の判読結果より、さらに多くの PV を判読できるようになった。

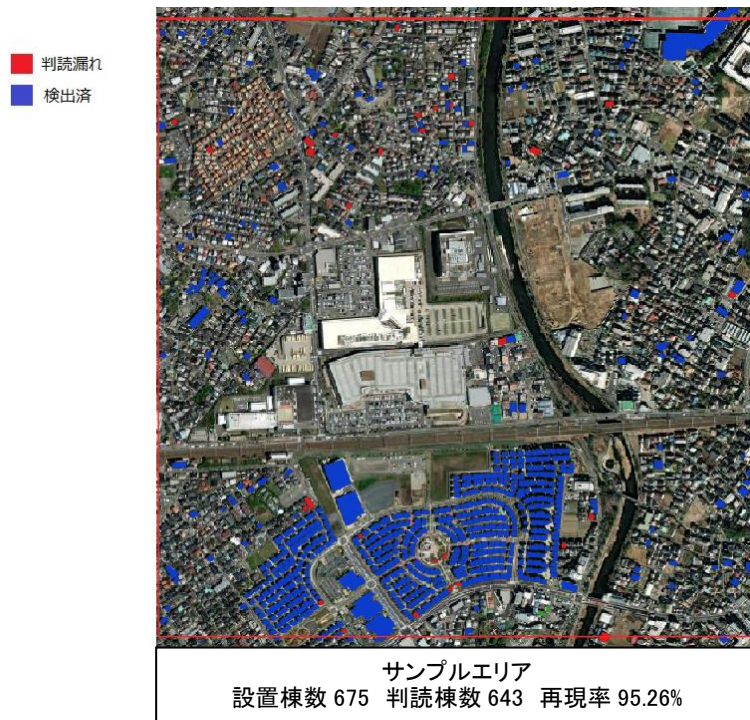




図 3.2-9 改良版衛星画像 AI 分析結果の可視化

工期的な制約から AI モデルの構築はここまでとしたが、精度向上の勘所が掴めたため時間が許せばさらなる精度向上が可能である。

さらにこの判読結果における再現率を算出した。



84.3 ポイント向上

図 3.2-10 衛星画像を用いた PV 判読結果の網羅率検証

衛星画像専用の重みモデルを構築し、これを用いて AI 解析を行った結果、当初の網羅率検証と比較して 84.3%の向上が図れた。時間の関係で一部地域でしか検証は行えなかったが、有効性は確認できた。すべての地域でこの結果が得られるわけではないが、当初目標の衛星画像を用いた AI 解析結果の網羅率 80%は概ねクリアできると考えられる。これ以降の検証は、航空画像 AI 判読結果とのマージを行った結果において総合的に評価する。

2) 全国の PV 判読の実施

PV 判読システムと衛星画像データセットを用いて全国の対象 6,300 メッシュの処理を実施した。航空画像データセットと異なり、AI 解析用の画像整備に画像分割という工程が入るが、のちに画像接合という処理が発生しないため、航空画像を用いた AI 解析より高速に処理が行われる。結果として日本全国の AI 解析が 5 日程度で完了した。

3) 衛星画像を用いた AI 解析における有用性の確認

最新の衛星画像データセット“vivid”を用いた AI 解析の有用性を確認するため、航空画像を用いた AI 解析結果と、経年変化箇所において比較検討を行った。比較対象地域は、航空画像 2016 年撮影 5 年の経年変化が懸念される愛知県内の 8 km×8 km の範囲内で、比較検討は目視によるものである。

下は、衛星 AI 分析結果を、GIS を用いて可視化した結果である。、GEOSPACE CDS を背景にした場合（左画像）、一見すると判読結果と一致していないように見える。しかし判読元の衛星画像を背景にするとその確からしさが見て取れる（右画像）。このように衛星画像による AI 判読は、GEOSPACE CDS の更新サイクルが 3 年以上の都市近郊や中山間地の経年変化を補う手段として有用・有効であることが実証できた。

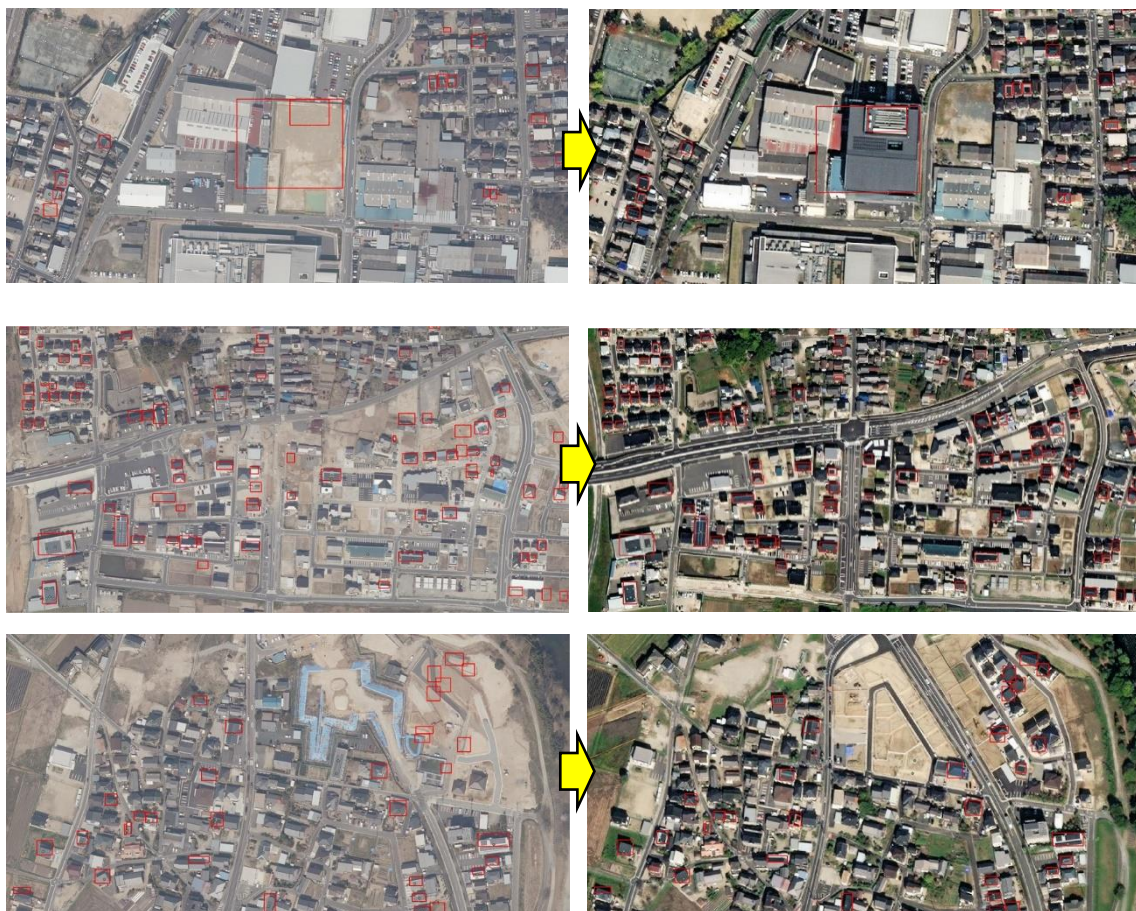




図 3.2-11 航空画像の経年変化箇所における衛星画像 AI 解析結果

4) 衛星画像の誤検出における課題と対応

日本全国の判読結果を可視化して確認したところ、建物以外に田畑を一定以上の大きさで誤検出していた。これは衛星データ専用の重みモデルを構築する際に、同様のパターンの教師データ量が足りないことと、検出の閾値を極端に下げたことに起因していると考えられる。最終的には建物データで除去できるが、事前に機械的に除去しておくことが望ましい。

特性としては検出の確度である probs 値が低く、検出矩形が大きいことから、probs 属性が 0.5 値未満のすべての検出結果、または probs 属性が 0.8 未満且つ検出矩形が大きい検出結果を全国一括除去することで対応した。中には実際に正の検出結果もあったが、本来 probs 属性が 0.5 値以下の結果は除去すべきためそれらも除去することとした。



図 3.2-12 衛星画像の田畑の誤検出（左：対策前、右：対策後）

5) 航空画像 PV 判読結果と衛星画像 PV 判読結果とのマージにおける課題と対応

①判読元が異なる2つの地物の相対的な位置ズレ

下記画像は、同じ領域で切り取った JIS 衛星画像、CDS 航空画像である。赤枠が衛星画像から判読した PV 短形、青枠が航空画像から判読した PV 短形である。双方を比較すると家屋1棟ほどのズレが生じている。どちらかが一方的にズレているわけではなく、それぞれの画像が位置的な誤差を含んでおり、その誤差が相対的な位置ズレを起こしている。GISなどでマッピングする場合、航空画像の PV 判読結果は航空画像を、衛星画像の PV 判読結果は衛星画像を背景画像にすることが1つの解決策となりうる。



図 3.2-13 判読元が異なる2つの地物の相対的な位置ズレ

②高層建物の傾きによる位置ズレ

真上から撮影されていない高層建物の傾きが正射変換されておらず、位置ズレを起こしているケースも多く存在する。2次元投影したPV判読結果は当然隣の建物や道路上に投影される。



図 3.2-14 建物の傾きによる位置ズレ

原因は、空中写真測量に基づいてピクセル単位で位置補正されたオルソ画像（精密オルソ）でないことである。空中写真の幾何補正にとどまっているものが多い。国土地理院の Web サイトにオルソ画像についての解説があるので以下に引用する。解決の方向性としては、ステレオ撮影した画像からオルソを作成していない衛星画像などでは、撮影時のオフナディア角（入射角）が深い（20 度以上）撮影画像を避けることが望ましい。

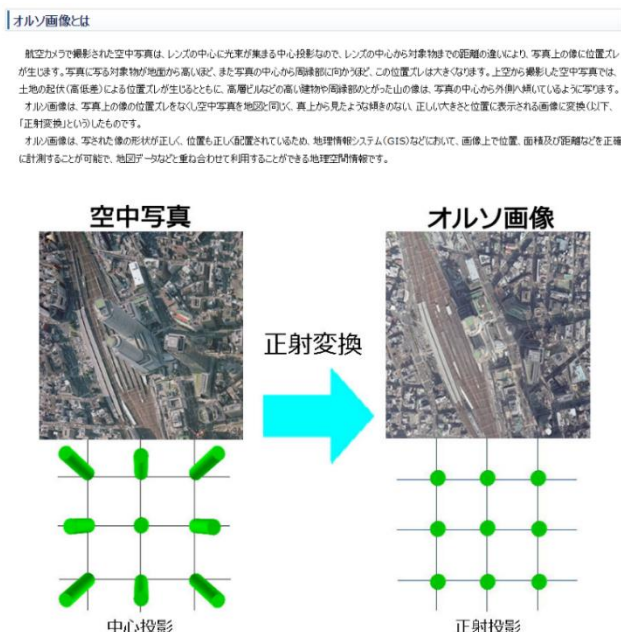


図 3.2-15 国土地理院 Web サイトにおけるオルソ画像の解説

出典：国土交通省国土地理院 HP

③ AI の検出の位置ズレにより建物形状から外れる可能性があるケース

屋根 PV は屋根形状によっては南側に設置されるため、検出が少しずれた場合、検出対象の画像位置情報と建物形状位置情報の誤差によって検出ポイントが建物形状から外れる可能性がある。本課題については、建物形状にバッファ（3m 程度）を持たせることで許容することができる可能性がある。



図 3.2-16 AI 検出における位置ズレ

(3) PV 判読結果のうち誤判読・過剰判読データの削除

衛星画像 PV 判読結果は、航空画像 PV 判読結果の判読元画像の時点が古い地域を補完するためにマージすることを前提としている。このため、衛星画像の時点が新しい地域をすべて使用することが理想であるが、3.2 (2) 5) で解説したとおり、航空画像 PV 判読結果との位置ズレが懸念されるため、なるべく航空画像分析結果と時点に近い衛星画像分析結果を使わず、時点が 2 年を超えた地域の検出結果のみ使用することとした。

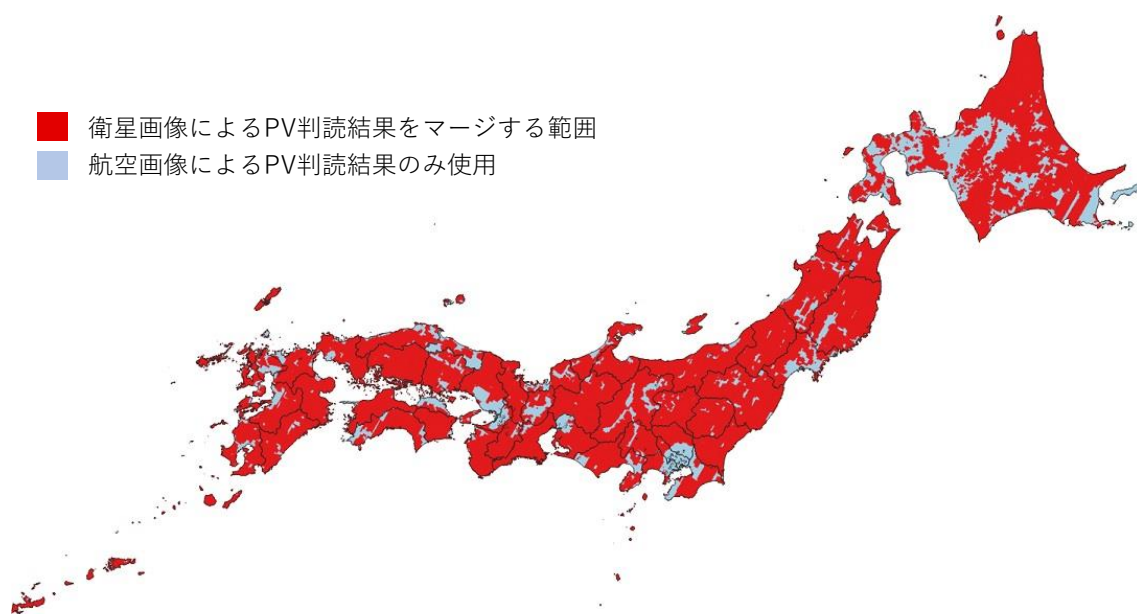


図 3.2-17 衛星画像 PV 判読結果のうち、航空画像 PV 判読結果のマージに使用する範囲

上記マージする範囲外の判読結果を削除することを前提に、PV 判読結果の誤判読・過剰データの削除を以下の工程で実施した。

- ① GEOSPACE CDS と撮影時点が 2 年以内の地域の検出結果を削除
- ② 前述、3.2 (2) 4) で実施したフィルタリング処理
- ③ 人海戦術による手動削除 (航空画像 PV 判読結果と同様の誤判読・過剰データを削除)
- ④ 航空画像 PV 判読結果の検出短形の範囲に含まれる、衛星画像 PV 判読結果ポイントを削除

①～④の順に誤判読・過剰判読データの削除を行った結果を以下に示す。

衛星画像を用いた PV 判読件数	2, 278, 999 件
①による削除処理	⇒ 1, 332, 605 件
②によるフィルタリング処理	⇒ 1, 101, 946 件
③による手動削除処理	⇒ 1, 028, 499 件
④の空間演算による削除	⇒ 631, 529 件

(4) 航空画像 PV 判読結果と衛星画像 PV 判読結果とのマージ

上述 3.2 で実施した航空画像を用いた AI 分析結果と本項で実施した衛星画像を用いた AI 分析結果ポイントデータにマージした。

その結果、航空画像を用いた PV 判読件数 3, 069, 495 件、衛星画像を用いた PV 判読による補完件数 631, 529 件、計 3, 701, 024 件となった。

3.3 FIT 事業計画認定情報を活用した PV 導入場所の特定

1) FIT 事業計画認定情報から PV 導入場所を特定する上での課題

①現状の把握

経済産業省資源エネルギー庁がインターネットで公開している事業計画認定情報公表用ウェブサイト (<https://www.fit-portal.go.jp/PublicInfo>) から、事前にダウンロードした事業計画認定情報（以下 FIT 情報という）の CSV データファイルをもとに、商用のアドレスマッチングサービス（住所から緯度・経度等の座標情報へ変換を行うサービス）を活用して緯度・経度に変換し、GIS に取り込んで地図上に展開した。

変換する際に、マッチングした位置情報のレベルを（都道府県、市町村、大字、番地、号、枝番）の 6 段階で特定した。地図上に転換した FIT 情報をこの 6 段階で色分けして表示した。

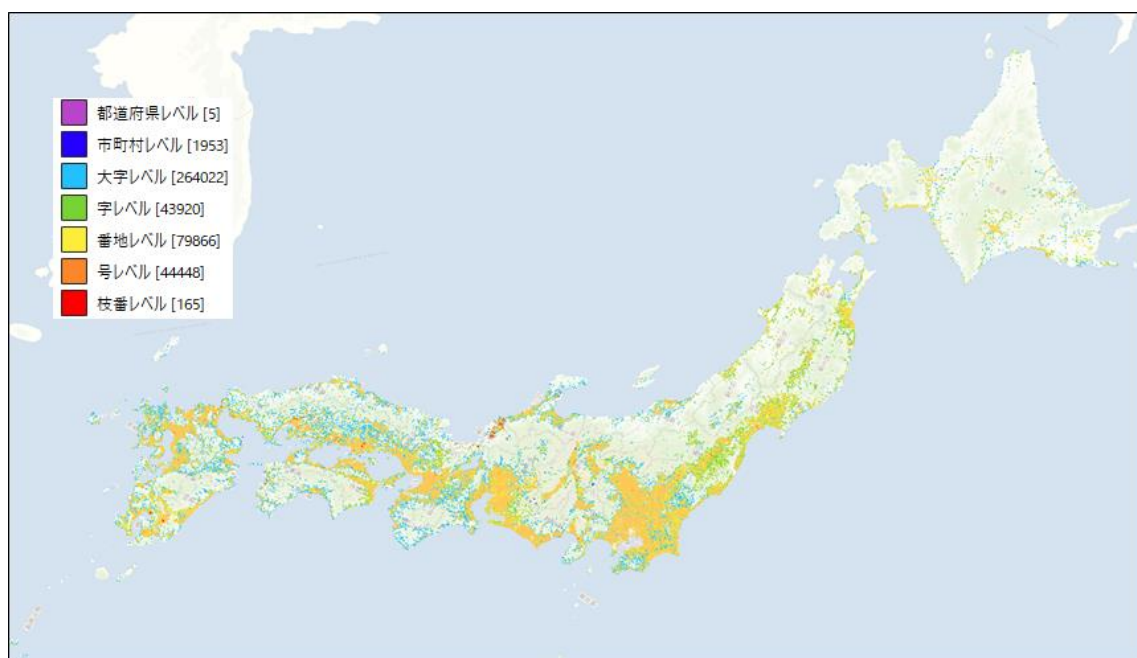


図 3.3-1 FIT 事業計画認定情報分布図（アドレスマッチングレベル表示）

その結果、場所が特定できると考えられる“号レベル”のマッチングが全体の 1 割強と少ないことが判明した。全体の 50%以上が“大字レベル”以下の位置情報としては大きな誤差を含む情報に該当し、PV 導入場所の特定を行うに必要な位置精度を有しておらず、基本的に使用できないと判断した。

② PV 導入場所を特定する上での課題

FIT 事業計画認定情報を活用した PV 導入場所特定の目的は、AI による PV 導入場所の対象外である野立ての PV の位置情報（緯度・経度）を特定することにある。

しかし、FIT 事業計画認定情報に記載されている事業者の住所から GIS の地図上に展開可能な緯度・経度等の位置座標にすべて変換することは現状では難しい。

その要因は、野立て PV など FIT 認定情報の多くは地番表記で登録されており、それに対応したアドレス・マッチングテーブルが一般のアドレスマッチングサービスに存在しないことにある。逆に住居表示で号レベルまで記載されている建物 PV は正しい場所が得られることを確認している。



図 3.3-2 正しく取得できた建物 PV の FIT 認定情報

2) FIT 事業計画認定情報を用いた代替案

①現状の FIT 認定情報を活用した代替案

アドレスマッチングのレベルに依存することなく、FIT 事業計画認定情報の地域性を俯瞰的に把握する方法を検討した。代替案として、市区町村別に各 FIT 事業認定情報の太陽電池の出力容量 (kW) を集計して容量別に地図上で段彩表現を行えるよう地図調整を行った。市区町村レベルまでデータを集約することによって、約 100% の FIT 認定情報を活かすことができる。

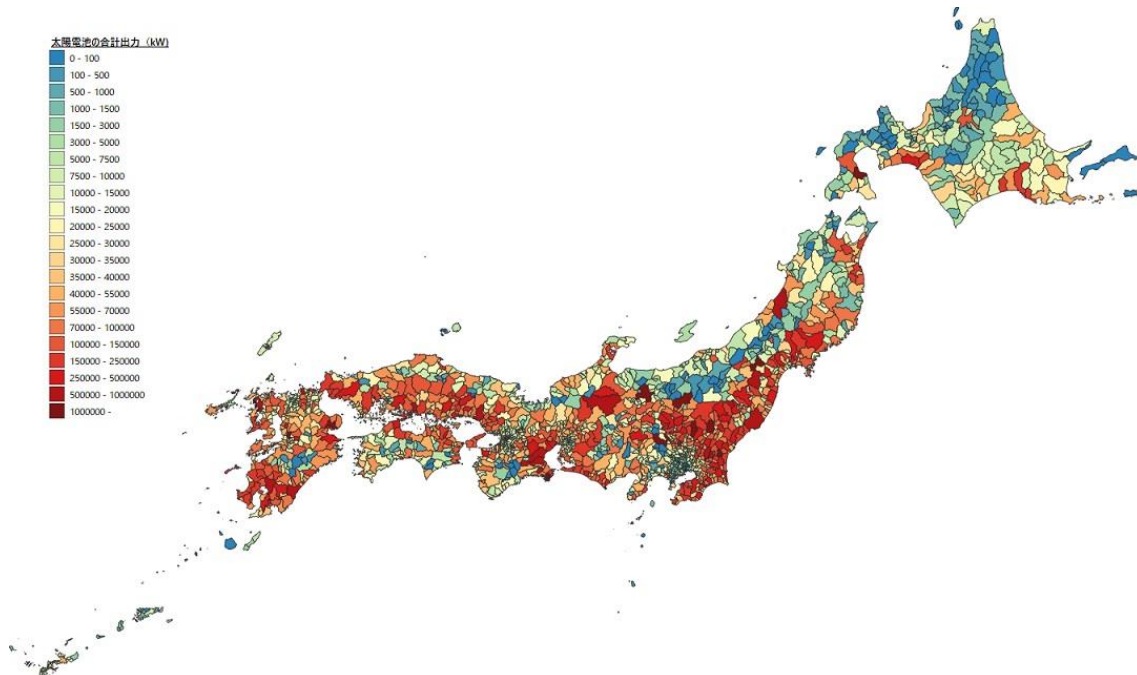


図 3.3-3 市区町村別 FIT 太陽電池の出力容量総計 (kW)

②AI 解析による野立て PV 導入状況の把握

本業務における FIT 情報活用の目的は、本業務で把握する建物 PV 以外の事業用 PV、主に野立て PV の導入状況の把握にある。建物 PV 同様に AI 解析を用いて PV 導入状況を把握することが最も現実的な手法であると考え。さらに建物 PV と比較して、ターゲットとする PV の面積が大きいいため、位置の特定が目的であれば使用する画像も 1m で十分解析が可能であり、全国の解析も短時間で実施することが可能である。但し、パネルの形状を把握する際には、パネル全体で一つのポリゴンを形成するか、パネル一つ一つにそれぞれポリゴンを形成するのかの判断が難しいこと、地域によっては位置特性も大きく異なることが課題となる。地域ごとに PV の取得方法を変える、入力画像のサイズを変え一度に判読できる PV の範囲を変えるなどの方策が必要になる。

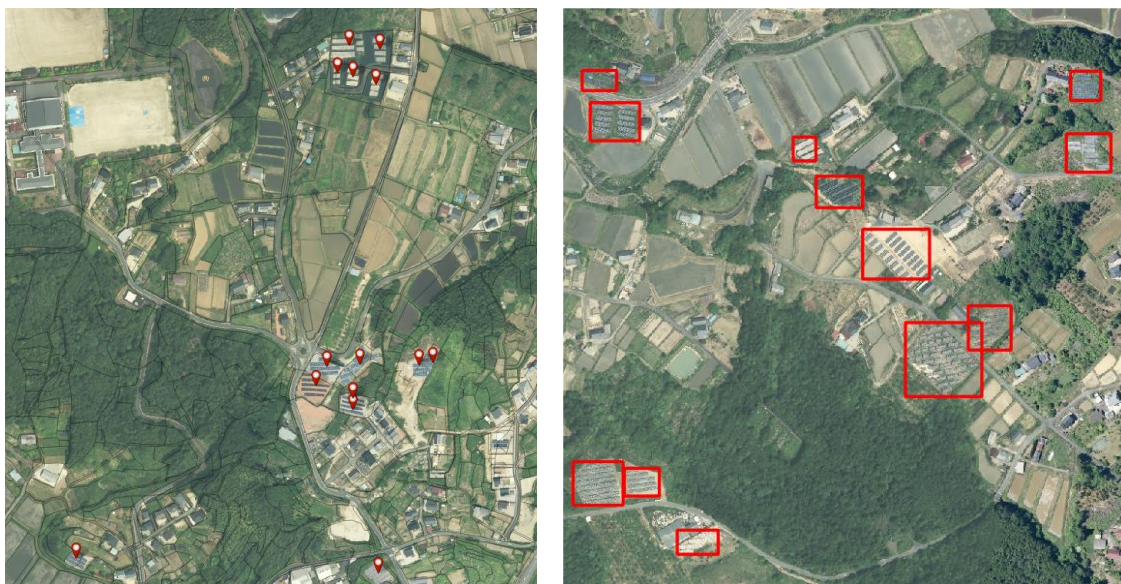


図 3.3-4 AI 解析を用いた野立て PV 導入状況把握（恵那市）

3.4 PV 導入場所の可視化 (2.1~2.3 の統合)

PV 導入場所の可視化に関しては、“3.1 航空画像を用いた AI 分析による導入場所の特定”、“3.2 衛星画像を用いた AI 分析による導入場所の特定”の工程において、すでに可視化を実施している。ここでは PV 導入場所の中で特徴的な箇所において可視化を行うとともに、統計情報を用いて全国的な PV 導入状況データの可視化を行う。但し、分析結果は AI による予測値である。

まずは、AI 解析による PV 導入場所の予測結果をすべて、GIS に取り込み可視化した。

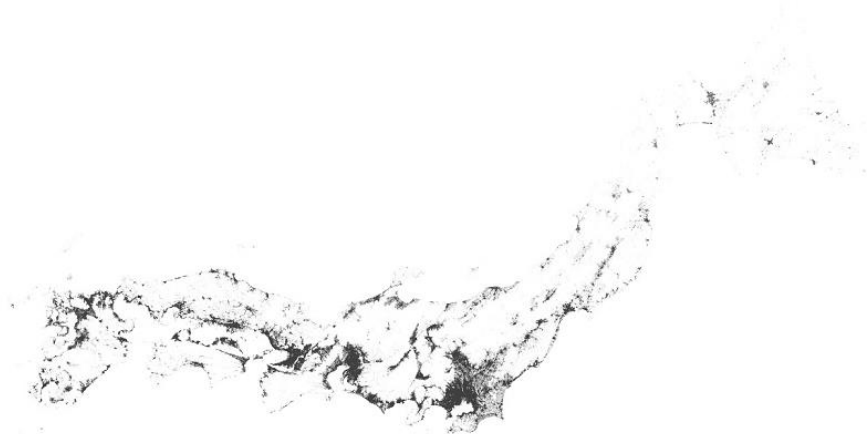


図 3.4-1 AI 解析による PV 導入場所の可視化

次に、XYZ タイル、zoom level 15 (約 1 km 四方) のメッシュ図郭の中で PV 導入箇所が最も多い地域 (兵庫県神戸市) を可視化した。



図 3.4-2 PV 数をもっとも多い地域 (ズームレベル 15)

次に、最も標高が高い PV を可視化した。標高 3,080m の槍ヶ岳山荘の屋根上に設置されている PV である。



図 3.4-3 最も標高が高い PV

次は、全国で最も建物 PV 導入数が多い、岡山県倉敷市の PV 設置状況を可視化した。

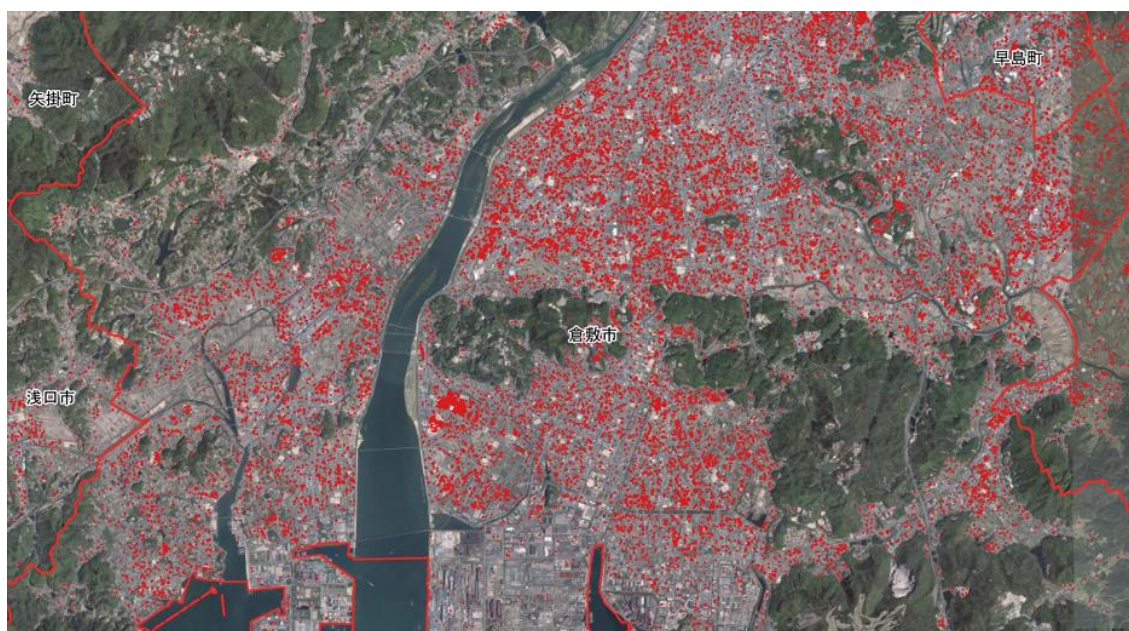


図 3.4-4 最も建物 PV 導入数が多い倉敷市の PV 設置状況

さらに、行政界ポリゴンと市区町村別統計情報（人口）を用いた PV 導入状況の市区町村別の分析結果を可視化した。行政面積は、GIS を用いて行政界ポリゴンから算出した数値を使用し、統計情報（人口）は、“令和 3 年 1 月 1 日住民基本台帳年齢階級別人口（市区町村別）（総計）”を使用した。

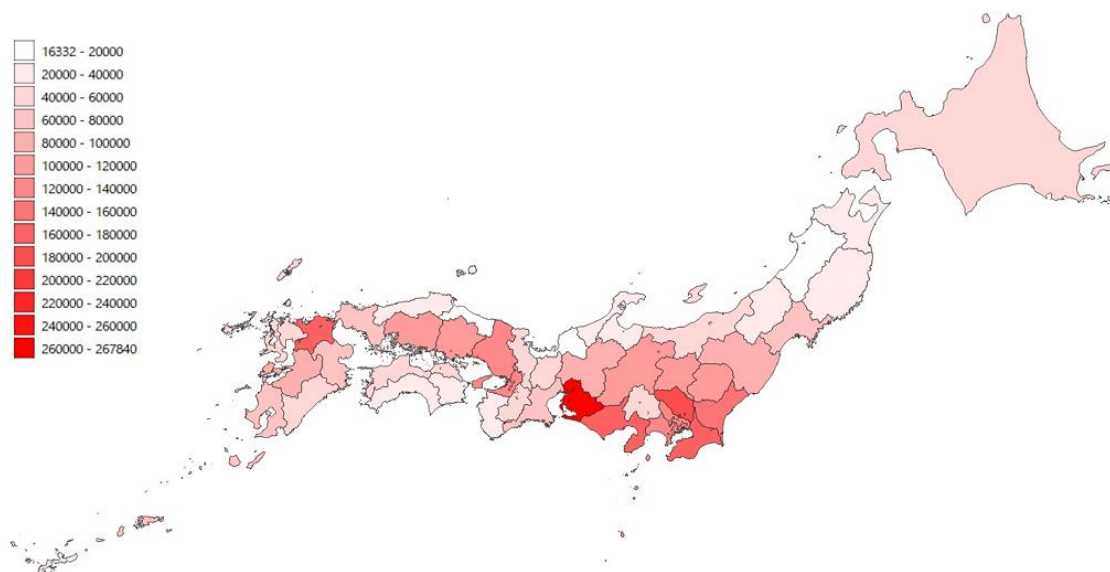


図 3.4-5 都道県別 PV 設置数

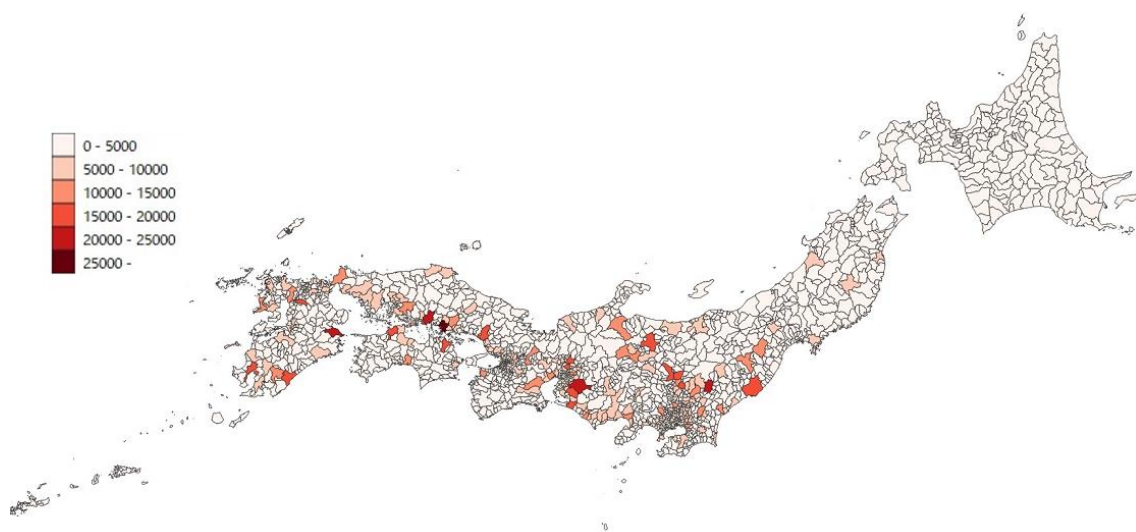


図 3.4-6 市区町村別 PV 設置数

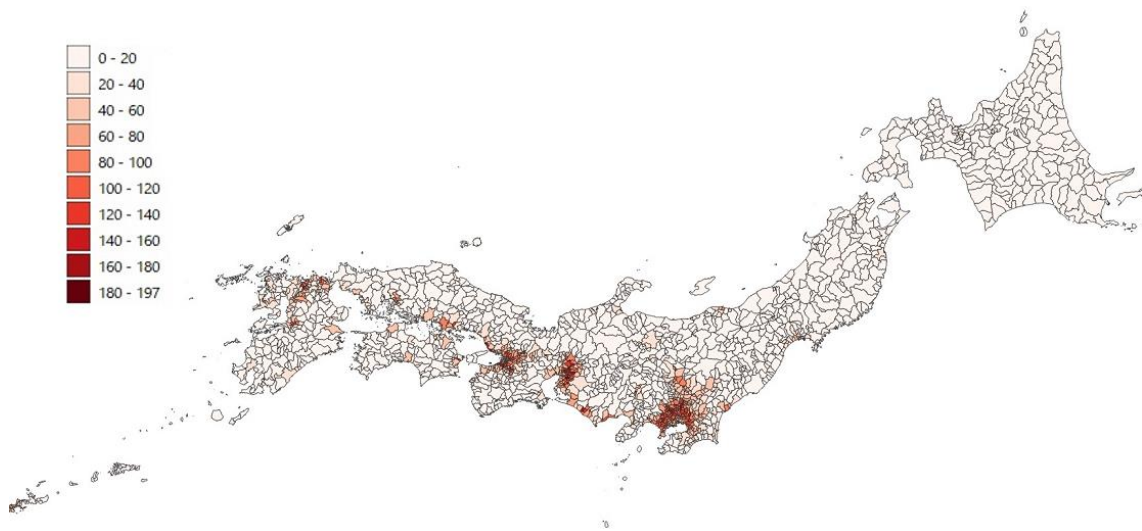


図 3.4-7 市区町村別 1k㎡あたりのPV設置数

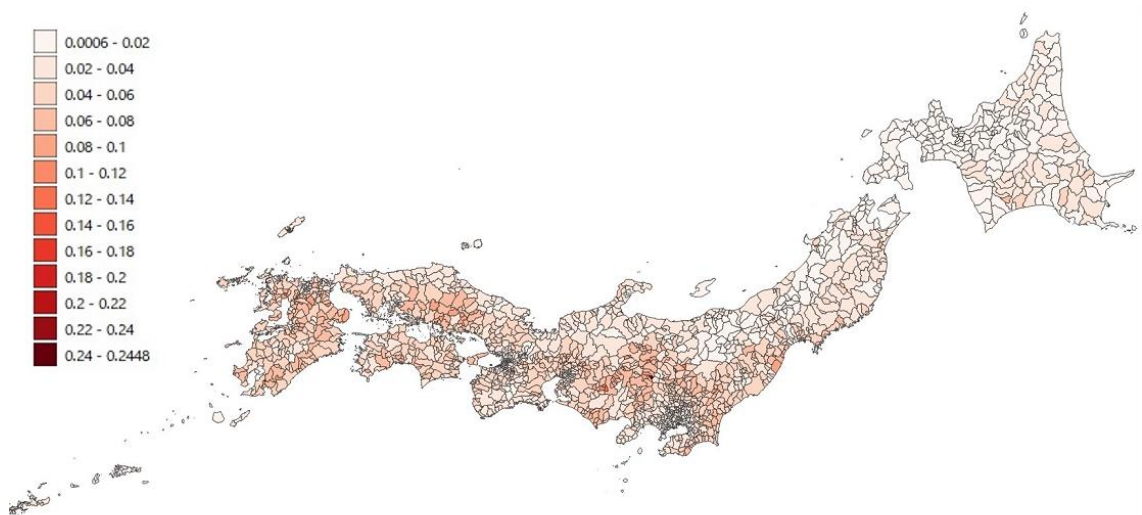


図 3.4-8 市区町村別 1人あたりのPV設置数

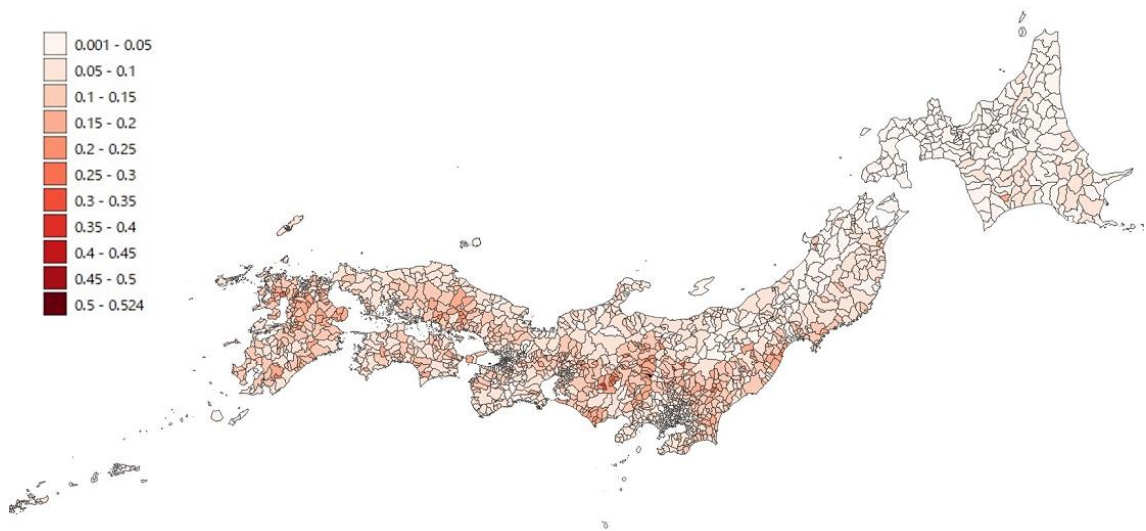


図 3.4-9 市区町村別 1世帯あたりのPV設置数

以上、AI 解析による PV 導入場所を GIS に取り込み、様々な視点から可視化を行った。